

平成元年度モズク養殖生産者会議の開催

県内のモズク生産者が一同に会し、モズク養殖における現状や課題について話し合う。平成元年度モズク養殖生産者会議が11月24日、水産業改良普及所で開催された。

会議は、各地区の養殖生産状況報告を受けた後、事例報告として、(1)伊平屋、伊是名漁協におけるモズク漁場計画について、(2)成果を上げている、宮古浦底地区漁場造成の実例について報告があり、最後に全体討議を行う。(専技室)



熱心に意見交換が行われたモズク会議(参加人員60人)

各地区の養殖状況及び事例報告については、次のように集約される。

1. 養殖生産

全体的に言えることは、元年度の養殖状況は生育とも大変良好であった。5～6年前に比べ、ほぼ安定生産ができるようになった。しかしながら、一部地域ではあいかわらず不安定であり、特に新規養殖漁家については、今一つ、漁場の使い方、あるいは漁場特性についての把握が急務である。現段階では、漁場の特性をつかむまでいろいろと方法を検討しながら、養殖を試みる必要がある。同じ方法では毎年同じ失敗をくり返す。

2. 加工処理

加工場を有している漁協では、同じ問題をかかえている。「養殖に対する加工場の処理能力」が十分把握されないため、どの工場も最盛期に入るとパンク状態が続いている。このことは、品質の問題とも関連するので「沖縄県モズク販売促進協議会(仮称)」等設置するなどして、県全体の生産計画を立てるとともに、各単協毎の方針を示すべきではないかと思慮される。

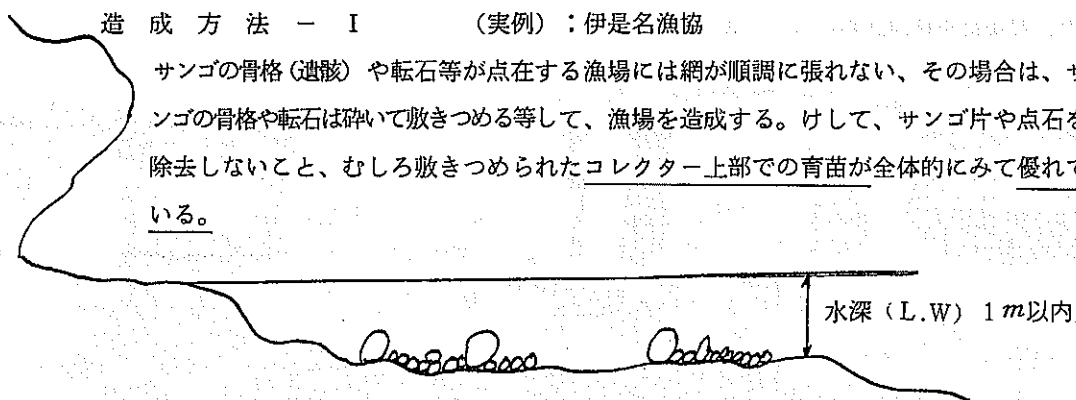
3. 漁場造成（事例報告）

これまで、各地区漁協で実施されてきたモズク養殖漁場の造成事例について図で紹介する。

モズク養殖生産者会議は、養殖漁家の唯一の情報交換の場となっている。毎年参加者も多く、熱心に意見交換が行われる等、1年間の養殖生産の反省、総括の場ともなっており、生産者は毎年同会議を心まちにしているとのことである。

造成方法 - I (事例)：伊是名漁協

サンゴの骨格（遺骸）や転石等が点在する漁場には網が順調に張れない、その場合は、サンゴの骨格や転石は砕いて敷きつめる等して、漁場を造成する。けして、サンゴ片や点石を除去しないこと、むしろ敷きつめられたコレクター上部での育苗が全体的にみて優れている。

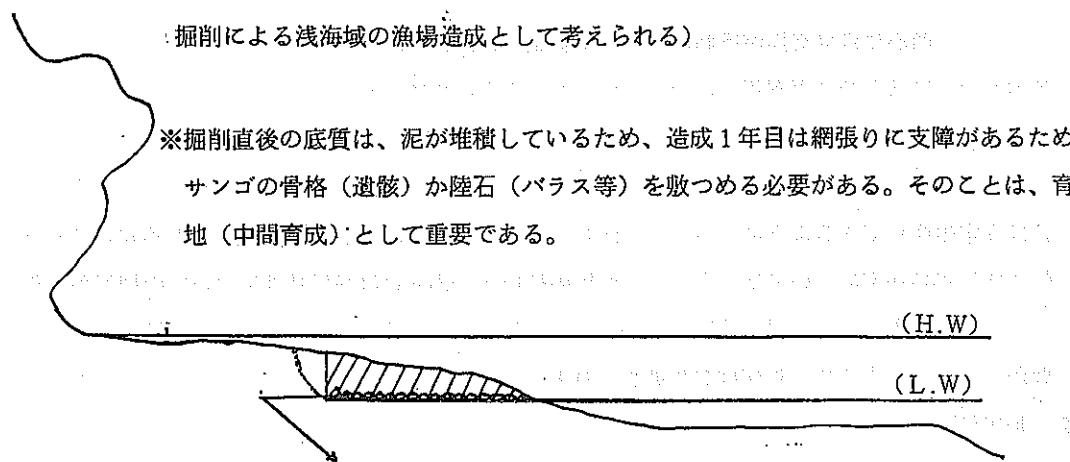


伊是名漁協では、浅い漁場（干上がった状態になる場所）を掘削し、干上がらないようにするための漁場造成が行われている。（5年計画で造成事業が進められている。）

造成方法 - II

（掘削による浅海域の漁場造成として考えられる）

※掘削直後の底質は、泥が堆積しているため、造成1年目は網張りに支障があるため、サンゴの骨格（遺骸）か陸石（バラス等）を敷きつめる必要がある。そのことは、育苗地（中間育成）として重要である。



掘削してあとは、底面にサンゴの骨格等を敷きつめる。

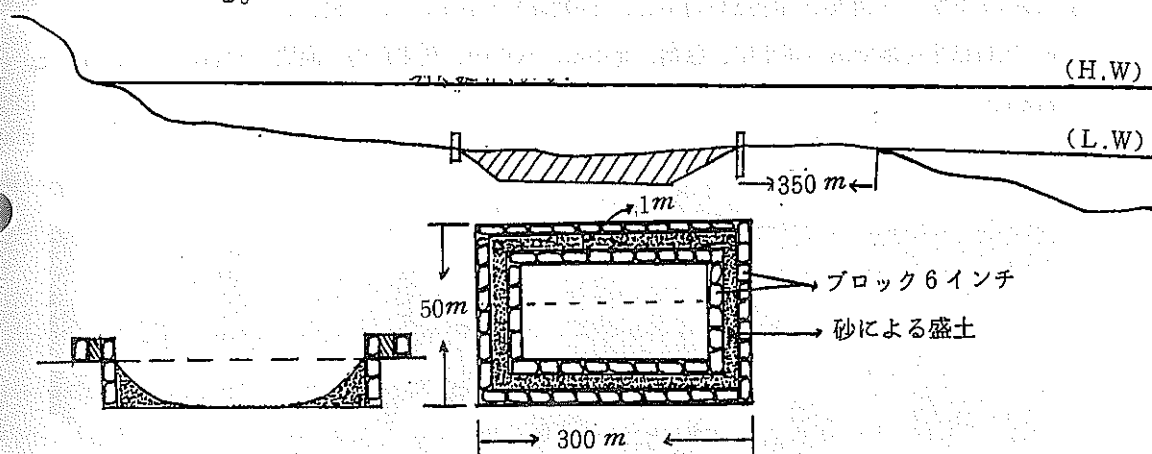
※（サンゴの骨格の代わりに陸石のバラス等が考えられるが実験例はない。）

造成方法 - III

(実例)：恩納漁協

屋嘉田潟田原は恩納地区の唯一の育苗漁場であるが、干潟が長くその利用に苦慮していた。最近、漁協と役場で育苗漁場の造成試験が実施された。

- ① 造成の主眼は、干潮時に干上がらないようにすることであり、その方法としてブロック盛土による30cm掘削してタイドプル方式をとった。
- ② ただしこのやり方は、あくまでも育苗場としてであり、本張漁場は別に設けてある。



造成方法 - IV

(実例)：勝連漁協、与那城漁協

干潟の藻場造成（モズク等）のための耕耘

天然モズク漁場を耕耘することにより、浮泥の沈着した基質の入れ替えができるため、モズクの着生、生育に好影響を与える。

- ① その方法は、耕耘前の磁気探査の実施
- ② 探査確認後は、バジー搭載ユンボで耕耘する。

